

## 神話から英雄譚へ

——ちりめん本「日本昔噺」シリーズにおけるチェンバレンと  
ジェイムス夫人による『古事記』からの再話の比較——

大塚 奈奈 絵

### 1. はじめに

すでに拙稿<sup>(1), (2)</sup>で述べたように、ちりめん本の翻訳者ジェイムス夫人 (Mrs. T. H. James または Kate James, 1845-1928) は、日本語の会話はできたが、読み書きのできる範囲は限られ、“Japanese Fairy Tale Series” (「日本昔噺」シリーズ) に収録された作品は、各国語に翻訳された昔話集などからの再話したものであったと考えられる。これらジェイムス夫人の翻訳した作品の中には、江戸時代以前から御伽草子や赤本、あるいは能の作品として一般に親しまれた話も含まれているが、*The Hare of Inaba* (『因幡の白兎』) と *The Princes of Fire-Flash and Fire-Fade* (『玉の井』 または 『彦火々出見尊』<sup>(3)</sup>) は、『古事記』からの再話であり、チェンバレン (Basil Hall Chamberlain, 1850-1935) が翻訳した *The Serpent with eight heads* (『八頭の大蛇』) と合わせると、「日本昔噺」シリーズには『古事記』からの3つの再話が採用されていることになる。

712年に成立したとされる日本最古の古典である『古事記』は、江戸時代に刊本が出版され、本居宣長による注釈書が出版されて研究されるようになったが、明治時代に入っても、庶民、ましてや児童に親しまれる書物とは言い難いものであった。したがって、日本で児童書という概念が成立していなかった1887 (明治20) 年前後に、20冊からなる「日本昔噺」シリーズという児童向けの昔噺集に『古事記』から3作品が収録されていることは、少々奇異に感じられる。一般には、チェンバレンが1882 (明治15) 年に『古事記』の英訳である “*Ko-ji-ki,*” or “*Records of ancient matters*” (以下、*Ko-ji-ki* と略す) を出版しているため、尾崎るみが「チェンバレンがその中から選び出したエピソードを、ジェイムズ夫人が子どもたちにより分かりやすい形に整えたものと理解できる」<sup>(4)</sup>と述べているように、『古事記』からの再話はチェンバレンの意向であり、ジェイムス夫人による『因幡の白兎』と『玉の井』もチェンバレンの *Ko-ji-ki* からの再話であると考えられている。

チェンバレンとジェイムス夫人の関係については、チェンバレンがハーン (Lafcadio Hearn (小泉八雲), 1850-1904) への書簡で「最も古い友人の一人」と書いていることが知られている<sup>(5)</sup>。夫の海軍中尉の T. H. ジェイムス (Thomas Henry James, 1840?-1910) は、英国海軍の測量士として1876 (明治9) 年11月に海軍兵学寮 (のちの海軍兵学校) で測量術と数学を教えるために来日し、芝山内海軍省属舎第三号に住んだ<sup>(6)</sup>。チェンバレンは、1873 (明治6) 年に来日し、翌年から海軍兵学寮で英語と幾何学を教え、芝区切通シ町に住んでいたが、1876 (明治9) 年12月に芝山内海軍省属舎十号に住み替えたという記録<sup>(7)</sup>が残っていて、夫妻とは住居もごく近く、成長して児童作家となったジェイムス家の長女のグレイス・ジェイムス (Grace Edith James, 1882-1965) の思い出話<sup>(8)</sup>からも、チェンバレンとジェームス一家は家族ぐるみの親しい付き合いであり、ジェイムス夫人を長谷川武次郎 (1853-1936) に紹

介したのはチェンバレンであったと考えられている。チェンバレンはハーンへの手紙で、ジェイムス夫人には3人の子どもがあり、最初は子どもたちのために物語を書いた（“for them it was, in the first instance, that she took to story-writing”）<sup>(9)</sup>とも述べている。

ただし、チェンバレンの *Ko-ji-ki* は、古代の日本語研究のための言わば研究書であり、チェンバレンとジェイムス夫人は、これを西洋の子ども達に受け入れられる話とするために、いくつかの工夫を施している。本稿では、ジェイムス夫人の再話の特徴を考察するために、チェンバレンの『八頭の大蛇』と *Ko-ji-ki* の本文の異同を見た上で、ジェイムス夫人の『因幡の白兎』と『玉の井』と *Ko-ji-ki* を比較・考察する。比較に際しては、*Ko-ji-ki* は、国立国会図書館デジタルライブラリーで提供されている1882年出版の図書<sup>(10)</sup>を、ちりめん本については神奈川大学図書館所蔵本を参照した。なお、『古事記』と内容が重複する『日本書紀』（『日本紀』）については、アストンの英訳の出版が1893（明治26）年であるため、本稿では検討の対象とはしない。

また、『因幡の白兎』については、現在に至るまで多様なかたちで出版を重ね、最近では複数の教科書にも採用されているため、様々な角度から論じられ、その中ではジェイムス夫人訳の『因幡の白兎』について言及される場合もある<sup>(11)</sup>が、本稿では、チェンバレンの *Ko-ji-ki* との対比に限定して考察する。

## 2. チェンバレンの *Ko-ji-ki* と「神道」観

チェンバレンによる『古事記』の英訳は、1882（明治15）年に “*Ko-ji-ki,*” or “*Records of ancient matters*” のタイトルで *Transactions of the Asiatic Society of Japan* の vol. 10 の Supplement として発表され、翌1883（明治16）年には *Ko-ji-ki or Records of ancient matters* が Lane Crawford から図書として出版された。

*Ko-ji-ki* の敬語表現を検証した高橋憲子は、「チェンバレンは「字句のままに本文を移す」という方針を貫くことにより、その英訳に『古事記』の文体を伝えているように思われる」と述べ、チェンバレンが本居宣長の『古事記伝』の解釈を土台にして翻訳を行なっていること、敬語表現については、宣長の説明が明確でなかった箇所については理解のあいまいさがうかがえるとしながらも、「チェンバレンの英訳に関する強い意志と『古事記』というテキストへの敬愛の念を感じることができる」<sup>(12)</sup>としている。

なお、*Ko-ji-ki* の冒頭の序で、チェンバレンは以下のように述べている。

Of all the mass of Japanese literature, which lies before us as the result of nearly twelve centuries of book-making, the most important monument is the work entitled “*Ko-ji-ki*” or “Records of Ancient Matters,” which was completed in A. D. 712. It is the most important because it has preserved for us more faithfully than any other book the mythology, the manners, the language, and the traditional history of Ancient Japan.<sup>(13)</sup>

チェンバレンは『古事記』を、古代日本の神話や風習、言語、伝説的な歴史を最も忠実に守り伝えている、日本文学の最も重要な業績であると考えたのである。

ところで、我々が『古事記』というタイトルから連想する日本の「神話」や「神道」について、チェンバレンはどのように考えていたのであろうか。『日本事物誌』（*Things Japanese*）の索引で「神話」を検索すると「歴史と神話（History and Mythology）」の項に参照があり、「同じ項目に神話も含めているのは、（この国の古代史では）神話と歴史を切り離すことが絶対に不可能だからである。実際に、両方とも等しく信じがたい作り話なのだから、切り離して考える必要がどこにあるか」とした上で、『古事記』と『日本書紀』の「神代」以降のあらすじを説明している。そして、イザナギが天照、月の神、須佐之男に宇宙の遺産を分けた時点で「この物語は統一性を失う」と述べている<sup>(14)</sup>。

「神道 (Shinto)」の項では、「シントーの文字通りの意味は「神の道」であり、神話や漠然とした祖先崇拜と自然崇拜——(中略)——に対して与えられた名前である」, 「すなわち、神道はしばしば宗教として言及されているが、今日その公式代弁者を勤め、それを愛国的制度として維持しようと欲している人々の意見においてすらも、その名[宗教]に値する資格がほとんどない。神道には、まとまった教義もなければ、神聖なる[聖書・経典の類]も、道徳規約もない」<sup>(15)</sup>としている。

なお、「文学 (Literature)」の項では、『古事記』について「現代に伝わっている中で最古の作品は、712年に遡る『古事記』である。これはときどき日本人の聖書であるといわれる。なぜならこの本の中には日本国民の神話やもっとも古い歴史が書かれているからである。しかし、この本は道徳的・宗教的な教えを含んでいない」<sup>(16)</sup>と述べている。

日本人は本質的に無神教だと考えるチェンバレンは、神道は宗教とは言えないとする一方で、『古事記』を日本の最古の文学として、また、日本の古代の歴史や文化を伝える文学として評価し、英訳を行なったものと考えられる。

### 3. *The Serpent with eight heads* (『八頭の大蛇』)

神道は宗教ではなく、神話と歴史が切り離せないというチェンバレンの指摘を前提に *The Serpent with eight heads* と *Ko-ji-ki* の異同をみていきたい。

*The Serpent with eight heads* (日本語タイトル『八頭の大蛇』) は、弘文社から「日本昔噺」シリーズの no. 9 として 1886 (明治 19) 年に出版された。表紙を含む全 14 丁、挿絵は小林永濯によるもので、平紙本とやや小型のちりめん本がある。神奈川大学図書館では、1886 (明治 19) 年 11 月出版のちりめん本を所蔵している。



「神奈川大学図書館所蔵資料 (表紙・奥付)」

冒頭では、この話を語るには「世界のはじまりにもどらなくてはならない」 (“we must go back to the beginning of the world”) とあり、世界を作ったとても力のある精霊 (very powerful fairy) から生まれた Ama という女の子が太陽を、Susano (Susa) と呼ばれる上の男の子が海を、下の男の子が月を授けられたというエピソードで始めている。

ここでは、チェンバレンは、「神」を表す *god* あるいは *deity* という英語を使わず、「*fairy*」という言葉を使用している。この点については、石澤は「違和感を感じる」<sup>(17)</sup>と述べ、また、英語が母語であるアン・ヘリングも、「神」という語彙の扱い方が「読者に違和感を与える」問題であるとしている<sup>(18)</sup>。高橋は *Ko-ji-ki* の序でチェンバレンが *Kami* は *deity* と訳したが、*Kami* は西洋の *deity* や *god* よりも低い存在としていることに加え、「「*fairy*」とは（中略）キリスト教の神以外の異教の神でデビルとされたもので」、チェンバレンは「キリスト教文化圏の英語を話す人々に、物語を読む上での違和感を与えないように」*fairy* と翻訳したと分析している<sup>(19)</sup>。

なお、*Ko-ji-ki* では *Ama* は *Heaven-Shining-Great-August-Deity*（天照大御神）、次に生まれたのが *His Augustness Moon-Night Possessor*（月読の命）、末子が *His Brave-Swift-Impetuous-Male-Augustness*（健速須佐之男の命）となっているが、『八頭の大蛇』では、神としての尊称が省かれ、*Ko-ji-ki* では多用される敬語表現もみられないことから、「神道」を宗教ではないと考えるチェンバレンが「神話」としてではなく、*fairy-tales* としてこの物語を書いたものと思われる。

また、この最初のエピソードは、*Ko-ji-ki* では、[SECT. XI.—INVESTITURE OF THE THREE DEITIES THE ILLUSTRIOUS AUGUST CHILDREN] に相当し、*Susa* が *fairy land* から追放される部分 [SECT. XVII.—THE AUGUST EXPULSION OF HIS-IMPETUOUS-MALE-AUGUSTNESS] までは、いわゆる「天岩戸」の中心的なエピソード以外、物語の内容は大幅に改変・省略されている。

改変された目立つ点としては、*Susano* が天界に來た理由がある。*Ko-ji-ki* では、与えられた海の国を治めずに “I wail because I wish to depart to my deceased mother’s land, to the Nether Distant Land” と泣きわめいて父の大神を怒らせて中つ国を追放されて天界に上ったのに対して、『八頭の大蛇』では、満足して夜の国を治めている弟に対して、“Susano was very angry and disappointed at having nothing but the cold wet sea to live in” として、天界で姉が機織りをしている美しい部屋におしかけて狼藉におよび、驚いた召使い達が死んでしまったという展開として、*Ko-ji-ki* にある須佐之男の命の誓約や勝さびのいくつかの蛮行などは略されている。この改変は、*Ko-ji-ki* の *Susano* の言葉や父神の激怒が、三人の神の誕生の前に父イザナギが亡くなった妻を追って黄泉国に行ったエピソードを受けたものであったことが理由として考えられる。長く連続した物語である *Ko-ji-ki* から *Susano* の物語を合理的に切り出すための工夫であり、同時に高天原での天照大神と須佐之男の命の冗長な逸話を取り除いて、一気に「天岩戸」の話につなぐという効果が生まれている。

さらに、『八頭の大蛇』では、*Ko-ji-ki* にある大宜津比売の神の殺害をはじめとする *Susa* の蛮行を略したり、軽い内容へと書き換えた上で、“poor Susa” は *fairy-land* を追われて地上に行くことになっている。一方で、*Ama* については “she was curious and always liked to see every thing” であることに神々が気付いてはかりごとを計画したという説明を入れるなど、人間的で、読者に分かりやすい内容となるような工夫がなされている。

続く天岩戸と *Susano* の天上界からの追放、八頭の大蛇退治の筋立ては、ほぼ *Ko-ji-ki* のストーリーに忠実に描かれているが、日本の酒を “beer” と訳し、八頭の大蛇の飲みっぷりを “drank and drank and drank” と繰り返すのはチェンバレンのユーモアの表現であろう。

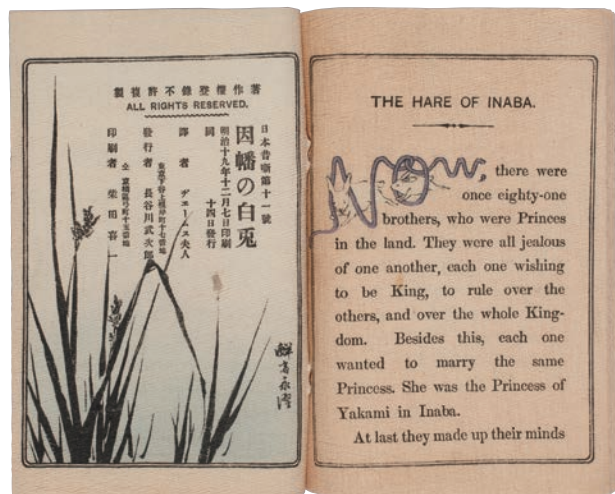
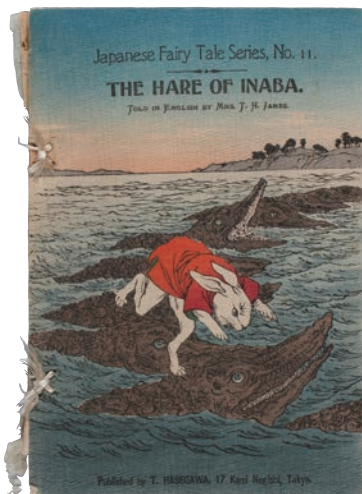
また、*Ko-ji-ki* では「その後、気まぐれで汚い下界の神となってふたたび現われる」<sup>(20)</sup> 須佐之男の命は、『八頭の大蛇』では、助けた美しい娘と結婚し、美しい宮殿を建てて、娘の両親とともに幸せに暮らしたとして、その様子が見開きの挿絵で添えられているが、テキストが全くない見開きの挿絵はちりめん本では極めてめずらしい。通常ちりめん本では、木版の挿絵に活版印刷の本文がバランスよくレイアウトされているのであるが、『八頭の大蛇』では物語のクライマックスである大蛇が酒を飲む図に加えて、この宮殿の場にもテキストが全く見られない。まるでチェンバレンが「そして幸せに暮らしました」というイメージを強調しているようにも感じられる。チェンバレンは、*Ko-ji-ki* で須佐之男の命が

櫛名田比売に送った和歌の始めといわれる「八雲神詠歌」を略す一方で, “he was very kind to her, although he had been so rude to his elder sister” という文章を加えている。また, *Ko-ji-ki* では天照大神に捧げられた大蛇の尾から出てきた剣は *Susano* の子孫に代々受け継がれ, 現在では皇室に伝わっているとして物語を終えている。

チェンバレンは, *Ko-ji-ki* の須佐之男の命の話を部分的に抜き出し, 舞台を神の国からおとぎの国へ変えた上で, わがままにより失敗を犯して追放された若い *fairy* が, 大蛇と戦って美しい娘と宝剣を得て幸せに暮らすという分かりやすい貴種流離譚, または, 西洋的な竜退治型の英雄譚として再話したと考えることができる。

#### 4. *The Hare of Inaba* (『因幡の白兔』)

『八頭の大蛇』に続く『古事記』からの再話である *The Hare of Inaba* (日本語タイトル『因幡の白兔』) は, 弘文社から「日本昔噺」シリーズの no. 11 として 1886 (明治 19) 年に出版された。表紙を含む全 9 丁, 挿絵は小林永濯によるもので, 平紙本とやや小型のちりめん本がある。神奈川大学図書館では, 1886 (明治 19) 年 12 月出版のちりめん本を所蔵している。



「神奈川大学図書館所蔵資料 (表紙・奥付)」

『因幡の白兔』は, *Ko-ji-ki* では, 須佐之男の命から数えて 6 代目の Deity Master-of-the-Great-Land (大国主神) の最初の逸話, [SECT. XXI—THE WHITE HARE OF INABA] と [SECT. XXII.—MOUNT TEMA] の先頭部分からの再話である。*Ko-ji-ki* と『因幡の白兔』の本文を pt. 1~9 に分け, その対比を表 1 に示す。

pt. 1 でまず気付くのは, ジェイムス夫人が 81 人の王子の兄弟の物語として話をはじめていることである。神の国, あるいはチェンバレンの *fairy-land* とも異なった, 昔ばなしのような設定となっている。また, 主人公には呼び名がなく, 最後まで “the eighty-first brother” (81 番目の弟) と呼ばれている。これは, *Ko-ji-ki* では “Deity Great-Name-Possessor” (大穴牟遲の神) が, 試練を乗り越える度に名前を変えて合計 5 つの名を持ち, 最後に国を治める「大国主神」となったとしているために, このような表現を選んだのではないと思われる。

ジェイムス夫人は、80人の兄達は皆、因幡のYakami姫と結婚して王国の全てを手に入れたいと望んでお互いを嫉妬していたが、乱暴で争い好きな兄達のやり方を好まない善良で温厚な（good and gentle）末の王子を嫌い、不親切にふるまうことでは一致していたと述べている。姉娘によるシンデレラのいじめを彷彿とさせる説明であるが、兄弟の性格についての描写は*Ko-ji-ki*ではなく、この部分は、ジェイムス夫人の創作である。

末の王子は、兄達の荷物を持たされ、従者のように兄達の後を歩いて行ったという箇所以降（pt. 2～9）のあらすじは*Ko-ji-ki*と同様であるが、読み比べると、*Ko-ji-ki*の直訳の文章に対して、ジェイムス夫人の文章はより具体的で、「わに」をばかにする言葉（pt. 4）や“jealous”や“wishing to be King”（pt. 1）など登場人物の心理描写が付け加えられている。セリフが多く挿入され、うさぎの後悔の言葉（pt. 4）なども書かれていて、より生き生きとした場面の展開と人物の描写になっていることが分かる。さらに、ウサギの苦境が“very sick and miserable”, “in terrible pain”（pt. 2）など形容詞を用いて強調され、ドラマを盛り上げる工夫がされている。

また、*Ko-ji-ki*では、サメを意味する「海のわに」を“crocodiles of the sea”（pt. 3）、「蒲黄」（がまのはな）を“the pollen of the sedged”（pt. 6）と誤って訳しているが、『因幡の白兎』でも、それぞれ、“the sea crocodiles”（pt. 3），“the pollen of the sedged”（pt. 6）としていることから、ジェイムス夫人がチェンバレンの翻訳を参照していることは明かである。

*Ko-ji-ki*では八上比売が“Deity Great-Name-Pocessor”と結婚するといううさぎの予言に先立ち、うさぎが（八上比売の使いである）「兎神」であると説明されている（pt. 7）が、『因幡の白兎』ではこれは省かれているために、兄弟の求婚を知るはずのないうさぎの予言は少々唐突な感がある。また、「兎神」の予言が「荷物を運んでいる（低い身分）にも関わらず、八上比売を手に入れるだろう」であるのに対して、『因幡の白兎』では、「荷物を運んでいるにも関わらず、最後には姫と国の両方を得る」となっている（pt. 7）。それに続けて、姫は親切で善良な81番目の王子を選び、王となって、生涯幸せに暮らしたと終わっている。（pt. 9）

一方、原作の*Ko-ji-ki*では、80人の兄達は八上比売を手に入れた弟を憎み、再三殺すのだがその度に弟は蘇る（pt. 9）。須佐之男の命から太刀と弓矢と琴を奪って兄達を退け、娘の須世理毗売を正妻にして、葦原の中つ国の王となった。八上比売は正妻に遠慮して、子どもを木の股に残して因幡へ帰ったとされる。このあとも*Ko-ji-ki*では、沼河比売への求婚の歌や正妻の嫉妬などが続き、おとぎ話風の「幸せに暮らしました」では終わっていない。ジェイムス夫人は、*Ko-ji-ki*の大国主神の生涯から「因幡の白兎」のエピソードのみを抜き出し、結末を加えて独立した物語としているのである。兎と鮫の話は「南海諸島からインドにかけて分布している」<sup>(21)</sup>話と類似するもので、元々一話完結の物語が『古事記』に組み入れられと考えられるため「再度一話完結型に独立させやすい物語だと考えられ」<sup>(22)</sup>、また、結末で姫を得ることから「求婚譚」として独立させたという指摘もある。

一方、ジェイムス夫人は原作にはない81番目の王子の人間性を“good and gentle, and did not like their rough, quarrelsome ways”（pt. 1），“kind and good”（pt. 8）と繰り返し強調し、最後には姫だけではなく国も得ている。つまり、ジェイムス夫人は、*Ko-ji-ki*の“WHITE HARE OF INABA”を、親切で善良な王子が人間性と（医学の）知恵によって不遇な環境を乗り越え、姫君と王国を手に入れて、幸福に生涯を送るという分かりやすい英雄物語、貴種流離譚として再話したと考えられる。

## 5. The Princes of Fire-Flash and Fire-Fade (『玉の井』)

ジェイムス夫人の次の『古事記』からの次の再話である *The Princes of Fire-Flash and Fire-Fade*（日本語タイトル『玉の井』または『彦火々出見尊』）は、弘文社から「日本昔噺」シリーズの no. 14 として

1887（明治20）年に出版された。表紙を含む全9丁、挿絵の画家は不明である。平紙本とやや小型のちりめん本がある。神奈川大学図書館では、1887（明治20）年7月出版のちりめん本を所蔵している。



「神奈川大学図書館所蔵資料（表紙・奥付）」

『玉の井』は、内容としては *Ko-ji-ki* の [SECT. XXXIX.—THE AUGUST EXCHANGE OF LUCK], [SECT. XL.—THE PALACE OF THE OCEAN-POSSESSOR], [SECT. XLI.—SUBMISSION OF HIS AUGUSTNESS FIRE—SHINE] に対応している。この物語は、『海幸山幸』として名高く、また、同じ題材による能曲『玉の井』も知られている。

ジェイムス夫人は、登場人物の名前を兄 His Augustness Fire-Shine（火照の命、海幸彦）から Prince of Fire-Flash へ、弟 His Augustness Fire-Subside（火遠照の命または彦火々出見尊、天津日高日子穗々手見の命、山幸彦など）を Prince of Fire-Fade と、神の名から王子へと変え、前作と同様に神の世界ではなく、おとぎ話風の設定としている。同様に Sea-Deity（海の神）の娘の Luxuriant-Jewel-Princess（豊玉毗売）を Sea-King（海の王）の娘の Princess Pearl としている。

また、『因幡の白兎』と同様に、チェンバレンが *Ko-ji-ki* では「ゆつ香木」を“cassia-tree”，サメを意味する「海のわに」を“crocodile”と誤って訳したのに対して、『玉の井』でも、それぞれ“cassia-tree”，“crocodiles”とされていて、ジェイムス夫人がチェンバレンの翻訳を参照していることは明かである。

*Ko-ji-ki* とジェイムス夫人の『玉の井』の内容には固有名詞以外の違いはほとんどないが、唯一、海王が王子に兄に釣り針を返す際の指示が省かれていることが目立っている。指示の内容は以下である。

What thou shalt say when thou grantest this fish-hook to thine elder brother [is as follows]: 'This fish-hook is a big hook, an eager hook, a poor hook, a silly hook.' Having [thus] spoken, bestow it with thy back hand.

釣り針に関する部分は呪いの言葉で、後ろ手の動作が呪術であることは、チェンバレンも注で説明しているが、ジェイムス夫人がこの部分を省いた理由は分らない。ただし、この部分が省かれても、兄が貧しくなり、怒って弟に戦いを挑むという流れに違和感はない。最後は，tide-flowing jewel（潮満珠）

と tide-ebbing jewel (潮干珠) の力で、兄が許しを請い、弟に遣えることを誓う。続いて、*Ko-ji-ki* では “So down to the present day his various posturings when drowning are ceaselessly served up” とあるところを、ジェイムス夫人は “His struggles in the water, when he thought he was drowning, are shown at the Emperor’s Court even to this very day” と物語を終えている。彦火々出見尊は神武天皇の祖父となるのであるが、この最後の文章について、高橋はチェンバレンやアストンの注を参照した上で、「ジェームズ夫人が、天皇家の現在性まで意識して翻訳していたとは考えられない」としている<sup>(23)</sup>が、チェンバレンが『八頭の大蛇』の最後を、太刀は今でも天皇家の宝として伝わっているとしたことと、内容的に呼応しているようにも感じられる。

ジェームス夫人のこの最後の文章によって、読者は物語が「王子は国王となって幸せにくなりました」というハッピーエンドであるかように感じるのであるが、*Ko-ji-ki* ではこの後に [SECT.XLII.—THE PARTURITION-HOUSE OF CORMORANT’S FEATHERS] が続いている。豊玉毗売は、出産に際して本来の鮫の姿になっているのを彦火々出見尊にのぞき見され、御子を妹に託して海に戻ってしまう。ジェームス夫人の娘のグレイス・ジェームスが『玉の井』の再話に際して、この話には続があるとして、豊玉毗売と彦火々出尊の贈答歌なども紹介し、聞き手の少年に “I think rather a nasty ending”<sup>(24)</sup>と言わせていることは興味深い。

ジェームス夫人は、話の場面を神の世界から王や王子が存在するおとぎばなしの世界へと変え、兄との諍いのあげくに海の国に追いやられた王子が、海王の娘と結婚し、海王から与えられた宝によって兄と戦って地上の国の王となる、すっきりとした英雄譚として再話したものと考えられる。

## 6. まとめ

『八頭の大蛇』、『因幡の白兎』、『玉の井』は、チェンバレンによる『古事記』の英訳である *Ko-ji-ki* からそれぞれのエピソードを抜き出してあらすじを整理し、いずれも、不遇な青年が戦って美しい姫と宝を得て幸せに暮らすという英雄譚として書き直されている。

『古事記』を英訳したチェンバレンは、日本の神道とは言い難いという考えを持つ一方で、『古事記』を日本の古代の最も古い歴史を記した文学であると評価して、弘文社の「日本昔噺」シリーズに *Ko-ji-ki* の話を西洋風の英雄譚としての再話を企画したものと想像できる。牧師の娘であり、敬虔なキリスト教徒であったジェイムス夫人も、日本の古代の神を異教の神 *fairy* と捉えるチェンバレンの方針に従って、再話に協力したのであろう。

ジェイムス夫人の『因幡の白兎』と『玉の井』は、正しいものが成功するすっきりとした筋立てと美しい文章、会話する動物や魚たちの楽しさが加わって、ジェイムス夫人の作品の中でも魅力的な物語となっている。

1986 (明治 19) 年という時代に、『古事記』をおとぎ話として再話することは、たとえ外国語の出版物であったとしても一部の日本人には抵抗があったかもしれないが、出版者である長谷川武次郎は洗礼を受けたキリスト教徒であり、チェンバレンの方針に異はなかったのであろう。また、『古事記』を題材にした作品としては、八岐大蛇退治の近松門左衛門の『日本振袖始』や御伽草子の『彦火々出見尊絵詞』、能曲『玉の井』なども知られていたものと考えられる。

なお、1918 年に Boni and Liveright から出版された *Japanese fairy tales* には、著者としてハーンに並んで、チェンバレンとジェイムス夫人の長女グレイスの名前があり、ジェイムス夫人の『因幡の白兎』等が収録されていて、チェンバレンとジェイムス一家の間にはそれぞれの帰国後も連絡があったものと考えられる。1935 年にチェンバレンが亡くなった際に、ロンドンの日本学会誌に死亡記事を書いたのはグレースで、日本で生まれたおとぎ話の絆が次の世代にまで繋がったことが興味深い。

## 〈参考文献〉

- アン・ヘリング「国際出版の曙——明治の欧文草双紙」福生市郷土資料室編『特別企画展 ちりめん本と草双紙』福生市教育委員会 1990 pp. 21-44。
- 石澤小枝子『ちりめん本のすべて：明治の欧文挿絵本』三弥井書店 2004。
- 石井正己『ビジュアル版日本の昔話百科』河出書房新社 2016。
- 石井正己編『昔話と絵本』三弥井書店 2009。
- 原田範行，黒崎政男，近藤裕子「形態論，出版文化史，表象文化論からみた縮緬本の統合的研究」東京女子大学比較文化研究所紀要（82）2021-01 pp. 1-47。
- 宮尾典男編『対訳日本昔噺集：明治期の彩色縮緬絵本 第2巻』彩流社，2009。

## 注

- （1）大塚奈奈絵「ジェイムス夫人とちりめん本 *The Flowers of Remembrance and Forgetfulness*：『今昔物語集』「兄弟二人殖萱草紫苑語」の翻案」神奈川大学人文学研究所報（68）2022-09 p. 85-95。
- （2）大塚奈奈絵「ジェイムス夫人訳 *The Cub's Triumph* とグリフィス訳 “The fox and the badger”——狐・猫・狸が化ける国「日本」——」神奈川大学人文学研究所報（69）2023-03 p. 119-129。
- （3）*The Princes of Fire-Flash and Fire-Fade* の初版には日本語タイトルがないが後の版では、『玉の井』となっているものもある。1887（明治20）に弘文社が出版した『簿記学例題』の巻末の「弘文社出版書目」による日本語書名や，1889（明治22）年に出版された平紙の合冊本の日本語タイトルは『彦火々出見尊』となっている。
- （4）尾崎るみ「長谷川武次郎のちりめん本出版活動の展開：『欧文日本昔噺』シリーズが20冊に達するまで」白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集（25）2022-03 p. 29-54。
- （5）Koizumi, Kazuo, comp. *Letters from Basil Hall Chamberlain to Lafcadio Hearn*, Tokyo, 北星堂書店, 1992. p. 84.
- （6）「警視庁 外国人国号姓名取調書差廻」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.C06090297400, 明治9年公文備考外出巻27 自87 至173（防衛省防衛研究所）。
- （7）「主船局 教師チャンブルレーンへ芝山内属舎貸渡方達」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C06090297000, 明治9年公文備考外出巻27 自87 至173（防衛省防衛研究所）。
- （8）James, Grace. *John and Mary's Aunt*, London, Frederick Muller, 1950. p. 104.
- （9）Koizumi, Kazuo, comp. *Letters from Basil Hall Chamberlain to Lafcadio Hearn*, Tokyo, 北星堂書店, 1992. p. 84.
- （10）Tr. by Basil Hall Chamberlain. *Ko-ji-ki or "Records of ancient matters"*（[Transactions of the Asiatic Society of Japan] Supplement to vol. X）B. Meikle john, [1882]. (<https://dl.ndl.go.jp/pid/1677745/1/1>)
- （11）小川雅子「学習指導要領における神話の位置づけと教材化の検討：小学校の国語教材「いなばのしろうさぎ」を中心に」『山形大学紀要・教育学』17（2）2019. 2 p. 47-64。
- （12）高橋憲子「チェンバレンによる『古事記』の訓みと英訳——その敬語意識を中心として——」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要：別冊』21（2）2014. 3 p. 175-186。
- （13）Tr. by Basil Hall Chamberlain. *Ko-ji-ki or "Records of ancient matters"*（[Transactions of the Asiatic Society of Japan] Supplement to vol. X）B. Meikle john, [1882]. p. i.
- （14）チェンバレン著 高梨健吉訳『日本事物誌1』（東洋文庫131）平凡社1969 p. 281。
- （15）チェンバレン著 高梨健吉訳『日本事物誌2』（東洋文庫147）平凡社1969 p. 196。
- （16）同 p. 30。
- （17）石澤小枝子『ちりめん本のすべて：明治の欧文挿絵本』三弥井書店，2004 p. 35。
- （18）アン・ヘリング『ちりめん本と草双紙』福生市教育委員会，1990 p. 30。
- （19）高島一美「ちりめん本「日本昔噺」シリーズ “The Serpent with Eight Heads”（『八頭ノ大蛇』）考——チェンバレンの翻訳姿勢と日本理解」『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要』9（9）2011. 3 p. 25-35。
- （20）チェンバレン著 高梨健吉訳『日本事物誌1』（東洋文庫131）平凡社1969 p. 283。
- （21）西宮一民校注『古事記』（新潮日本古典集成（新装版））新潮社2014 p. 59。
- （22）谷本由美「明治期児童向け古事記「いなばのしろうさぎ」のはじまり——チェンバレン「ちりめん本」から巖谷小波「日本昔噺」へ——」『同志社女子大学生活科学』45 2012. 2 pp. 44-53。
- （23）高島一美「ちりめん本「日本昔噺」シリーズ “THE PRINCES FIRE-FLASH & FIRE-FADE” 考——兄弟の争

- いの物語としての翻訳』『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要』8 (8) 2010. 3 p. 30-51。
- (24) James, Grace. *John and Mary's Japanese Fairy Tales*. London: Frederick Muller, 1957 p. 169.

別紙 表 1. *Ko-ji-ki* と『因幡の白兔』の本文比較

pt.	<i>Ko-ji-ki</i> [SECT, XXI—THE WHITE HARE OF INABA]	<i>The Hare of Inaba</i> 『因幡の白兔』
1	So this Deity Master-of-the-Great-Land had eighty Deities his brethren; but they all left the land to the Deity Master-of-the-Great-Land. The reason for their leaving it was this: Each of these eighty Deities had in his heart the wish to marry the Princess of Yakami in Inaba, and they went together to Inaba, putting their bag on [the back of] the Deity Great-Name-Possessor, whom they took with them as an attendant.	Now, there were once eighty-one brothers, who were Princes in the land. They were all jealous of one another, each one wishing to be King, to rule over the others, and over the whole Kingdom. Besides this, each one wanted to marry the same Princess of Yakami in Inaba. At last they made up their minds that they would go together to Inaba, and each one try to persuade the Princess to marry him. Although eighty of these brothers were jealous of one another, yet they all agreed in hating, and being unkind to the eighty-first, who was good and gentle, and did not like their rough, quarrelsome ways. When they set out upon their journey, they made the poor eighty-first brother walk behind them, and carry the bag, just as if he had been their servant, and as much a Prince as any of them all.
2	Hereupon, when they arrived at Cape Keta, [they found] a naked hare lying down. Then the eighty Deities spoke to the hare, saying: "What thou shouldest do is to bath in the sea-water here," and lie on the slope of a high mountain exposed to the blowing of the "wind." So the hare followed the instructions of the eighty Deities, and lay down. Then, as the sea-water dried, the skin of its body all split with the blowing of the wind, so that it lay weeping with pain.	By and by, the eighty Princes came to Cape Keta, and there they found a poor hare, with all his fur plucked out, lying down very sick and miserable. The eighty Princes said to the hare, "We will tell you what you should do. Go and bath in the sea water, and then lie down on the slope of a high mountain, and let the wind blow upon you. That will soon make your fur grow, we promise you." So the poor hare believed them, and went and bathed in the sea, and afterward lay down in the sun and the wind to dry. But, as the sun and the wind to dry. But, as the salt water dried, the skin of his body all cracked and split with the sun and wind, so that he was in terrible pain, and lay there crying, in a much worse state than he was before.
3	But the Deity Great-Name-Possessor, who came last of all, saw the hare, and said: "Why liest thou weeping?" The hare replied, saying: "I was in the Island of Oki, and wished to cross over to this land, "but had no means of crossing over. For this reason I deceived the "crocodiles of the sea, saying: 'Let you and me compete, and compute' the numbers of our [respective] tribes. So do you go and fetch every member of your tribe, and make them all lie in a row across from this island to Cape Keta. Then I will tread on them, and count them as I run across. Hereby shall we know whether it or my tribe is the	Now the eighty-first brother was a long way behind the others, because he had the luggage to carry, but at last he came up, staggering under the weight of the heavy bag. When he saw the hare he asked, "Why are you lying there crying?" "Oh dear!" said the hare, "just stop a moment and I will tell you all my story. I was in the island of Oki, and I wanted to cross over to this land. I didn't know how to get over, but at last I hit upon a plan. I said to the sea crocodiles, "Let us count how many crocodiles there are in the sea, and how many hares there are in the land. Come, every one of you, and be down in a row,

	larger.’	across from this island to Cape Keta, then I will step upon each one, and count you as I run across. When I have finished counting you, we shall count the hares, and then we shall know whether there are most hares, or most crocodiles.”
4	Upon my speaking thus, they were deceived and lay down in a row, and I trod on them and counted them as I came across, and was just about to get on land, when I said: ‘You have been deceived by me.’ As soon as I had finished speaking, the crocodile who lay the last of all seized me and stripped off all my clothing.	The crocodiles came and lay down in a row. Then I stepped and lay down in the row. Then I stepped on them and counted them as I ran across, and was just going to jump on shore, when I laughed and said, “You silly crocodiles, I don’t care how many of you there are. I only wanted a bridge to get across by.” Oh! Why did I boast until I was safe on dry land? For the last crocodile, the one which lay at the very end of the row, seized me, and plucked of all my fur.” “And serve you right too, for being so tricky.” said the eighty-first brother; “However, go on with your story,”
5	As I was weeping and lamenting for this reason, the eighty Deities who went by before [thee] commanded and exhorted me, saying: ‘Bathe in the salt water, and lie down exposed to the ‘wind.’ So, on my doing as they had instructed me, my whole body was hurt.”	“As I was lying here crying,” continued the hare, “eighty Princes who went by before you, told me to bathe in the salt water, and lie down in the wind. I did as they told me, but I am ten times worse than before, and my whole body is smarting and sore.”
6	Thereupon the Deity Great-Name-Possessor instructed the hare, saying: “go quickly now to the river-mouth, wash thy body with the fresh water, then take the pollen of the sedge [growing] at the river-mouth, spread it about, and roll about upon it, whereupon thy body will certainly be restored to its original state.”	Then the eighty-first brother said to the hare, “Go quickly now to the river, it is quite near. Wash yourself well with the fresh water, then take the pollen of the sedges growing on the river bank, spread it about on the ground, and roll among it; if you do this, your skin will heal, and your fur grow again.”
7	So [the Hare] did as it was instructed, and its body became as it had been originally. This was the White Hare of Inaba. It is now called the Hare Deity So the hare said to the Deity Great-Name-Possessor: “These eighty Deities shall certainly not get the Princess of Yakami. “Though thou barest the bag, Thine Augustness shall obtain her.”	So the hare did as he was told; and this time he was quite cured, and his fur grew thicker than ever. Then the hare said to the eighty-first brother, “As for those eighty Princes, your brothers, they shall not get the Princess of Inaba. Although you carry the bag, yet your Highness shall at last get both the princess and the country.”
8	[SECT. XXII.—MOUNT TEMA] Thereupon the Princess of Yakami answered the eighty Deities, saying: “I will not listen to your words. I mean to marry the “Deity Great-Name-Processor.”	Which things came to pass, for the Princess would have nothing to do with those eighty bad brothers, but chose the eighty-first who was kind and good.
9	So the eighty deities, being enraged, and wishing to slay the “Deity Great-Name-Processor.” ...	Then he was made King of the country, and lived happily all his life.